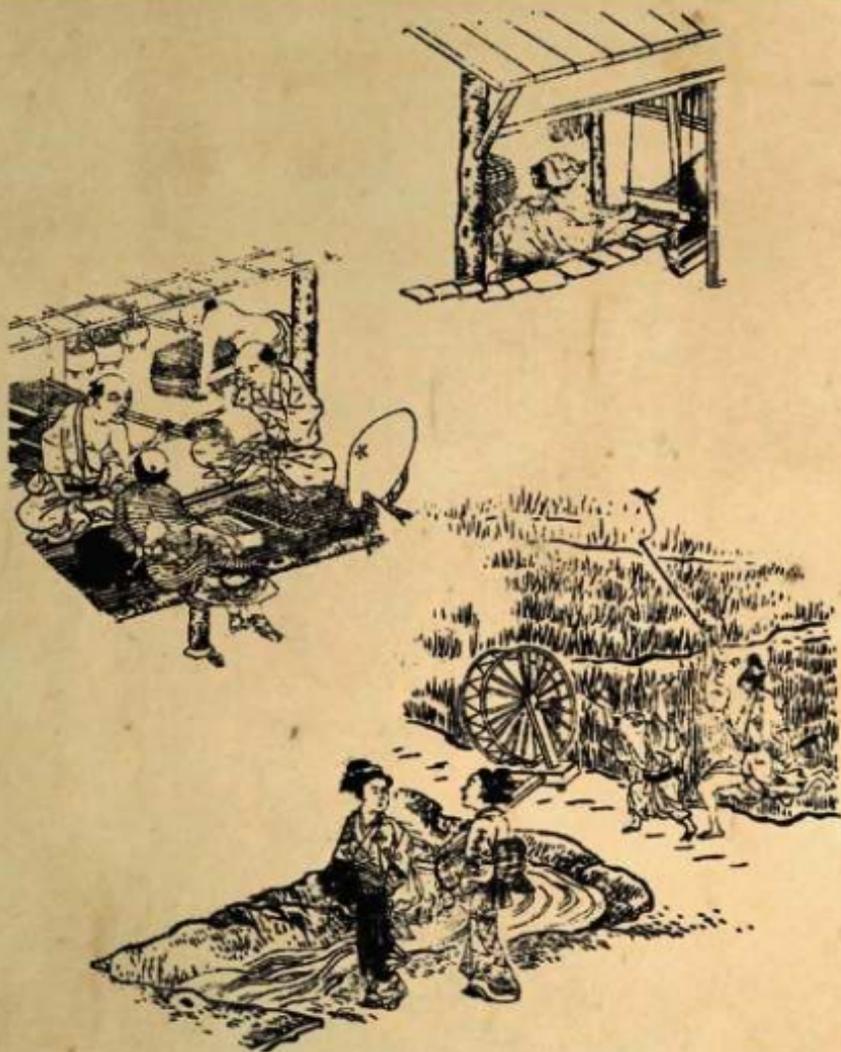


市制施行60周年記念

松原歴史ウォーク

3南西コース



松原市

目次

3. コース図	2-3
51 河内木綿と更池村・田中家住宅	4
52 石造「布忍橋」を記念した標石	6
53 称名寺に施されただんじり彫物	8
54 更池消防組碑と陸軍特別大演習	10
55 布忍郷東代村の浄信寺	12
56 廃寺となった西蓮寺	14
57 河合で発掘された奈良時代の役所	16
58 河合・古池の発掘	18
59 井宮家と石造不動明王像	20
60 河合の尻池「記念碑」	22
61 稱念寺と河合村門徒	24
62 河合神社と八上郡	26
63 松原市民運動広場と清堂遺跡	28
64 地域医療に貢献した井岡氏	30
65 松原村新堂の大工利助	32
66 新堂の中野好松と芝池経太郎	34
67 「河内音頭 岩井富丸碑」	36
68 弘法大師空海の惣井戸伝説	38
69 国の登録文化財の田中家住宅	40
70 高見神社と「ええじゃないか」	42
71 郷土芸能 高見台楽の復活	44
72 高見村惣道場の敬念寺	46
73 市内最古級の追分地藏尊道標	48
74 高見の里開発者の林明	50
75 高見ノ里駅津田式ケーボー号ポンプ	52
表 松原市行政区画の変遷の概要	54

※本文の柱下段のナンバーは、広報『松原歴史ウォーク』連載時の番号です



- 2 市域を国道 309 号線と府道堺・大和高田線(12号)を境として、北東・南東・南西・北西の4コースに分けました。



51

河内木綿と更池村・田中家住宅

木綿栽培の初見は更池村 「布忍八景」 扁額も紹介 南新町 1

江戸時代を通じて、松原の村々をはじめとして河内地方では綿作が盛んに行われていました。綿から織られた木綿は吸湿性があり、丈夫で肌ざわりがよく、そのうえ安価でしたので、庶民の実用的な衣料として欠かせないものでした。木綿は室町時代の15世紀ごろ、朝鮮半島から大量に輸入されました。やがて、三河国(愛知県)で綿が栽培されるようになり、これがわが国の綿作の始まりといわれています。

大坂周辺でも江戸時代初期に木綿づくりが広がっており、大坂市中に木綿問屋があったり、綿市が見られました。寛永15年(1638)の『毛吹草』という全国各地の特産物を紹介した本には、この時期、八尾の久宝寺木綿が名産として有名であったと記しています。

松原市域では、寛永10年(1633)11月の『更池村免定』という史料に初めて綿作の記事が登場します。布忍・南新町地域の更池村の年貢高を決めたその『酉年御物成之事』に稲作とならんで、「四ツ式拾五石六斗式升式合 木わた」とあります。木綿に対する税率が収穫の40%であることがわかります。市域でも、江戸時代の早くから綿作が行われていたことは確かでしょう。宝永元年(1704)、大和川が松原方面に付け替えられました。この結果、八尾や東大阪などの旧流路に出来た新田が砂地で綿作に向いていたこともあり、18世紀以後、河内木綿の名は広まっていきました。

宝永2年(1705)11月12日、更池村の人々も氏神とする布忍神社(北新町2丁目)に「布忍八景」と題する扁額が奉納されました。このなかの4景目の「平田秋月」で布忍地域の綿作についての俳句

が見られます。安知^{あんち}という人が「布忍野の綿の盛やけふの月」と詠んでいるのです。秋のころ、布忍の畑一面に植えられた綿の実が月あかりに照らされている光景が目にかびます。

同じ宝永2年の『更池村明細帳』には耕地の41%で綿を栽培していることが記されています。のちの明和9年(1772)の『更池村明細帳』によりますと、「八寸」^{はつすん}「黄花」^{おうが}「赤花」の3品種が植えられています。天保14年(1843)になると「てうせん」「土佐」という2品種も加わりました。

この、『更池村免定』や『更池村明細帳』を所蔵していたのは、更池村庄屋であった田中家(南新町1丁目)でした。同家は、浄土真宗本願寺派の教通寺^{めいとうじ}の西側にあたり、更池村の田畑の管理を行っていました。同家主屋は宝永6年(1709)の築造で、表門は文政年間(1818～29)の建立とされ、国の登録有形文化財となっています。

更池村に限りませんが、各村々では糸操りや木綿織りが農家の女性の重要な副業であったことが史料からうかがえます。しかし、近代に入って河内木綿は外国産の木綿におされて衰えていきました。それでも、その技術は松原の地場産業である金網づくりに、いまでも受け継がれています。



南新町・田中家住宅 ※非公開です

52

石造「布忍橋」を記念した標石

西除川を渡る長尾街道に更池村が天保3年に建立 南新町3

南新町3丁目の元ふれあい人権文化センター跡地に「布忍橋」
 「天保三年壬辰七月 更池村」と刻まれた標石が見られます。これ
 は、更池村が天保3年(1832)7月に西除川に架かる長尾街道の布
 忍橋北西詰に建てたものです。ここには、寛政8年(1796)12月に
 更池村の多聞院(真言宗)の龍昌がつくった惣井戸も掘られていま
 した。

江戸時代、更池村の庄屋をつとめていた田中家(南新町1丁目)
 に残る次の史料から布忍橋の変遷がわかります。

明和9年(1772)3月の『河州丹北郡更池村明細帳』に、「一、橋
 壱ヶ所 狭山池西除川筋奈良海道筋二掛ヶ申候」とあります。18
 世紀後半、西除川を渡る奈良海道ともよばれていた長尾街道に橋が
 設けられていました。すでに、延享3年(1746)11月の同村明細帳に
 も農民がつくった「板橋壱ヶ所」があり、これを村が修復したのです。

天保14年(1843)7月の更池村明細帳には、「一、石橋 壱ヶ所
 幅六尺長サ拾六間 狭山池西除川筋奈良海道筋二御座候 天保貳年
 卯九月廿五日 御公儀様江御願 奉申上 石橋相掛ヶ申候」と書か
 れています。このことから、村では御公儀、つまり幕府に願い出て、
 天保2年(1831)9月25日に幅1.8m、長さ29mの石橋が架け替
 えられたことがわかります。石橋の設置までは、延享3年の記述や
 明治5年(1872)2月の同村明細帳にも「往古板橋之処、天保二年
 卯年(中略)石橋相掛ヶ申候」とあるように、板の橋だったのです。

幕末に立派な石の橋ができたので、村人は新たに橋名を付け、記

念石を建てようと思いました。嘉永元年(1848)7月の田中家の『永代過去帳』は、庄屋として村政にあっていた9代当主の田中清右衛門紀定せいゑもん けいさだが頭取となって、布忍橋と名付けたと注記しています。

西除川はこのあたりで布忍川とよばれていたことや、石橋が更池村だけでなく、広く布忍地域を代表することから、布忍橋と命名したと思われます。架橋から10ヵ月後の天保3年7月に標石は完成しました。清右衛門をはじめ、多くの村人たちが世話人として、石面に名を刻んでいます。

ところが、石橋は、近代化と共に長尾街道の拡幅で撤去されました。さらに、標石は田中さん宅前北東角に移されるようになりました。それが、昭和41年(1966)9月25日の台風24号の被害で倒れ、一時的に教通寺きょうつうじ(浄土真宗本願寺派)と田中さん宅前の間を流れる溝の足踏みとして転用されたのです。このため、地元の人々が翌42年10月中旬、郷土の貴重な文化遺産を守ろうと石を溝から取り出し、現在地に保存したのです。

いまの布忍橋は、地域を水害から守るため、西除川の改修などで幅20m、長さ30mの鋼橋となり、昭和63年(1988)3月に竣工されたものです。



「布忍橋」標石

53

称名寺に施されただんじり彫物

更池だんじりに先駆ける彫又 又兵衛・弥三郎作か 南新町2

南新町地区の更池だんじりは、明治14年(1881)7月に堺市堺区
 大町の彫又一門の西岡弥三郎が彫り、堺市北区金岡町の河村新吾が大
 工を担ったと考えられています。高さ4.3m、幅2.4m、奥行3.6mで
 ケヤキづくりの堂々としたものです。この更池だんじりは、10月の
 布忍神社の秋祭りにあわせ、更池の檀那寺である称名寺(南新町2丁
 目)門前から出発して、町中を練り歩き、氏神に向かいます。興味
 深いことに、この更池だんじりの彫物と称名寺に彫られた彫物とが
 同様式で、その彫りが彫又一門の作事ではないかと考えられています。

称名寺は浄土真宗本願寺派で、正徳元年(1711)6月の更池村の
 『寺院取締帳』には、西本願寺を本山とする京都七条の万宣寺の末
 寺とあります。当時、元禄5年(1692)11月に普請されたかや葺き
 の堂が建っていました。開基の年はわかりませんが、延宝年間(1673
 ~80)に地主の忠五郎が堂を守り、その後、貞享4年(1687)まで
 は与惣右衛門が受け継いでいます。同貞享4年11月には、称名寺
 の寺号を西本願寺より与えられたとあります。これ以後、村の惣道
 場となって看坊(住職)も常住したのです。西本願寺の史料による
 と、本尊の阿弥陀如来像も寛文8年(1668)に与えられていました。

文化6年(1809)以降、本堂再建が少しずつ行われ、安政2年
 (1855)9月にはこれまで西向きであった本堂をいまのような東向
 きに建て直し、山門・庫裏・太鼓楼・井戸屋形・土蔵も整備されて
 いきました。明治6年(1873)ごろの境内図面を見ると、ほぼいま
 と同じ配置・規模であったことがわかります。現在、本堂裏(西側)

に江戸時代の称名寺惣井戸が建物にくいこまれる形で残っていますが、もともとは、西向きの本堂の前にあったものです。

だんじりに興味を持たれる愛好家の人たちによる彫物調査によると、称名寺には、板勾欄出人形式のだんじりの彫物と共通するものとして、山門の虹梁桁に見られる迫力ある青龍をあげることができます。また、本堂前の井戸屋形を見ると、桁組4面と4本柱の木鼻8組、合わせて12面に子・丑などにだんじり彫物特有の十二支が彫られています。さらに、山門横の土蔵屋根には、更池だんじりでも見られた獅噛みと同様の鬼瓦が添え付けられていました。

本堂に入ると、外陣柱間虹梁の臺股10面にだんじりのモチーフの1つになっていた中国二十四孝の彫刻を配置しています。このうち、安政6年(1859)5月上旬と書かれた墨書が数カ所見られ、「施主弥三郎」「施主利兵衛」の名も残っていました。

これらの彫刻は、作風から更池だんじりを彫った西岡弥三郎(当時21歳)が、師である父の又兵衛(明治13年没)作ではないかと推測されています。

明治14年の更池だんじり奉納に先駆け、すでに幕末に彫又一門が称名寺の再建に一役かっていた可能性があるのです。



称名寺

54

更池消防組碑と陸軍特別大演習

昭和7年、河合の野外統監部の警備

南新町 2

昭和初期、日本は軍国主義化と戦時体制へと進んでいきました。昭和7年(1932)11月13日、河内平野一帯で陸軍特別大演習が行われることになり、その1ヵ月前の10月1日に北河内郡守口町(現守口市)から移転新築されたばかりの北八下村河合の帝国女子業学専門学校(現大阪薬科大学)に野外統監部が置かれることになりました。

当初は、昭和天皇が新校舎へ行幸される予定でした。このため、学校では授業を休止し、学生の行動・服装・持物の心得が告示され、送迎役や接待役も選抜されて、学校あげでの準備が進められたのです。天皇陛下は、お風邪を召されて行幸がかないませんでした。参謀総長の閑院宮載仁親王など皇族方や陸軍高官が野外統監部となった校舎で視察されました。校舎をはさんで西除川や高見ノ里駅方面の北軍と、河合集落南方の南軍に分かれて訓練が行われたのです。

この時、河合の西北隣りにあたる布忍村更池(現南新町)の消防組の人たちは、近辺の警備にあたりました。その記念碑が南新町2丁目の一とビュー(人権交流センター)グラウンドに見られます。同所は、江戸時代以降、丹北郡更池村の灌漑池であった新池を昭和45年に埋めたものです。グラウンド北側、北堤であった場所に数基の石碑が立っています。中央の記念碑には、表面上部に「特別大演習警備記念 更池消防組」と2行に横書きされ、その下に発起人として、布忍村長の寺内憲治や更池区長の藤本藤一郎をはじめ、村会議員2名や顧問2名が記されています。

続いて、消防組の組頭である石川関次郎を筆頭に小頭7名、消

防手28名の名が3段にわたって刻まれています。下段には「^{とうせん}當村石匠石覺支店」とあり、布忍村清水(現南新町)の長尾街道沿いの石覺が石工にあたりました。

裏面は、「昭和七年十一月十三日」と縦一列に刻まれ、陸軍特別大演習の日を記しています。石碑は、すぐ西の南新町ホール側の旧公園にありましたが、埋立後、ここへ移したものです。

消防組とは、全国的な消防制度で、明治27年(1894)に組織化され、現在の民間人による消防団の前身にあたります。布忍村などの市域でも、大正元年(1912)7月1日から活動を始めました。

浄土真宗本願寺派の^{しやうぶつじ}称名寺(南新町2丁目)の横に、今は使われていませんが、火の見やぐらが設けられています。その高いやぐらに吊されて、事あるごとに打たれたと思われる^{はんしょう}半鐘が、現在、松原市消防本部に保管されています。高さ約52cm、直径約30cmの青銅製の^{かんしょう}喚鐘です。龍頭や乳の^{ちち}間を設け、表面の池の間に「更池消防組」「大正九年十二月 全村製」「寄附人 大阪府東成郡天王寺村字阿倍野一三九番地 黒田玉男」と刻んでいます。

大正9年(1920)12月に更池消防組が使用する半鐘を阿倍野に住む黒田氏が寄付したものです。



更池消防組特別大演習警備記念碑と半鐘

55

布忍郷東代村の浄信寺

親鸞・琢如絵像から知る真宗大谷派の変遷

東新町 5

東新町 5 丁目に東新町公園と東代公民館が隣接して見られますが、同地は新池を埋め立ててつくられたものです。新池は、江戸時代前半・延宝 6 年 (1678) の『河内国丹北郡東代村検地帳』に「八反三畝拾歩 寛永八未年池二成」とあります。寛永 8 年 (1631)、東代村の田畑を潤すために掘られたのです。すでに東代には、村北部に西池や寺池などが存在していたと思われ、これらより後に出来たので、新池と名づけられたのでしょう。新池があったことを示す記念碑が東代公民館に建立されています。

東代の集落は、旧新池から西側に広がっていますが、その一角に真宗大谷派の浄信寺が建っています。本堂には、本尊の阿弥陀如来像をはさんで 2 つの絵像が掛かっています。

絵像裏書によると、1 つは本山の東本願寺 15 世常如が延宝 2 年 (1674) に下付した東本願寺 14 世の「琢如上人真影」です。「河州丹北郡布忍郷東代村惣道場」とあります。

もう 1 つは、6 年後の延宝 8 年 (1680) に東本願寺 16 世一如が下付した浄土真宗開祖の「親鸞聖人御影」です。「河内国丹北郡布忍郷東代村惣道場浄信寺」と記しています。

琢如と親鸞の 2 つの絵像から読みとれることは、延宝 2 年当時はまだ寺の名が無く、惣道場とよぶだけでしたが、延宝 8 年ごろには浄信寺という名を東本願寺から認可されたことです。つまり、延宝 2 年以前、東代村には東本願寺の道場があり、この年、本山は前門首の真影を下しました。まもなく、同 8 年までには寺号が許されて

おり、同時に開祖の御影が与えられたことから、現在、見られるような寺院の形態が整ったのでしょう。

先の延宝6年の『東代村検地帳』にも、「一 屋敷 式拾四歩 道場」という記述があります。延宝7～8年まで、浄信寺の名前が無いことがわかります。ところが、それから100年以上たった寛政6年(1794)の『稲毛 木綿 早損作方内見帳』とよぶ作物の早損状態を記した史料では、浄信寺は田畑を所有するまでになっています。

17世紀前半以降、新池ができて作物の収穫が増えると共に、人々の檀那寺への信仰も強まったことが想像できます。やがて、文政2年(1819)に本堂が建て替えられました。その時の立派な棟瓦が2枚、いまま山門脇に保存されています。「文政二己卯年四月上旬 北宮村瓦屋彦二郎」「文政二己卯年四月下旬 北瓦彦」と刻しています。北宮村(羽曳野市高鷲)の瓦屋である彦二郎が葺いたのです。

なお、山門横に「臥龍地藏尊」が祀られています。この名は、境内に植えられ、地藏堂を覆うように茂るイブキの古木に由来すると伝えられています。あたかも、龍が臥しているかのようだからです。市域に残る古木の1つとして、一見する価値があるでしょう。



浄信寺

56

廃寺となった西蓮寺

東代の人々に信仰された浄土真宗本願寺派

東新町 5

現在、布忍の東代地区（現東新町）に真宗大谷派の浄信寺が建っていますが、大正時代後半まで、その西向いに浄土真宗本願寺派の西蓮寺も存在していました。いまから90年ほど前に西蓮寺は廃寺となり、その跡は住宅地となっています。それでも、西蓮寺の門徒の方々は西本願寺を本山として、堺市北区南花田町にある源光寺を通じて信仰を続けています。

延宝6年(1678)の『河内国丹北郡東代村検地帳』によると、江戸時代前半、浄信寺は惣道場として創建されていましたが、西蓮寺はまだ見られませんでした。

その後、寛政4年(1792)ごろの西本願寺の『河内国末寺帳』には、「小山妙楽寺下 東代村惣道場西蓮寺」と記されています。江戸時代後半までには、西蓮寺は現藤井寺市小山4丁目にある妙楽寺を上寺としていたことがわかります。

妙楽寺は、戦国時代の本願寺8世蓮如の河内布教以前、天台宗から浄土真宗に改宗したと伝えています。江戸時代前半ごろから、「河内十二門徒」の有力組織の1つとして、小山村だけでなく、現八尾・柏原・堺・松原などの村々にも多くの門徒をかかえていました。東代村もその1つだったのです。

ところで、寛政9年(1797)につくられた『東代村宗門帳』を見ますと、当時、東代村は34戸、人口141人と書かれています。庄屋の甚八は30歳で、7人家族でした。村人の構成は、1人暮らしから9人家族の大世帯までさまざまです。

宗門帳によると、浄信寺には33歳になる^{ほうれい}法例とよぶ僧侶が1人でお勤めをしていました。ところが、浄信寺の西側に並んで建てていた西蓮寺のことは、宗門帳には出てきません。常住する僧侶がいなかったからでしょう。それでも、宗門帳の書かれた3年前（寛政6年）の『稲毛 木綿^{かんせん} 早損作方内見帳』には、西蓮寺が一反八畝の田を所有していることを記しています。

西蓮寺が廃寺となった大正年間、本尊の阿弥陀如来像は妙楽寺に移されました。しかし、戦後、縁あって本尊が焼失していた同じ本願寺派の明善寺^{みんぜんじ}（大阪市住吉区大領2丁目）の本尊となって、現在に至っています。明善寺は、もともと安堂寺橋通^{あんどうしほし}（大阪市中央区南船場1丁目）にありましたが、昭和20年の大阪大空襲で焼け、のち住吉に移ったものです。安堂寺橋通の明善寺跡には、江戸時代以来、信仰の厚かった油掛地蔵が空襲の難を免がれ、いまも祀られています。

いまでは、西蓮寺のことを知る人もだんだん少なくなっています。しかし、西除川沿いの東代墓地（河合2丁目）には、大正4年（1915）の年号を持つ「西蓮寺同行中」と記した西蓮寺の門徒さんが葬儀に使った棺台が見られます。いまは延命地蔵尊の台石として、転用されています。



西蓮寺棺台

57

河合で発掘された奈良時代の役所

丹比野を流れる丹比大溝に関連が

河合 5

河合 5 丁目に市営更池第二団地が建っていますが、平成 22 年、その東側に市立学校給食センターが建設されることになりました。

この地域は、弥生時代から江戸時代にかけての河合遺跡とよばれる埋蔵文化財の分布地でしたから、市教育委員会によって発掘調査が行われました。その結果、たいへん重要な遺構が検出されたのです。

調査地からは、奈良時代の大型掘立柱建物を含め、11 棟以上の建物や井戸・溝などが見つかりました。建物跡は、約 70cm の深さに、直径約 20cm の柱を立てたと見られる穴が規則的に並んでいました。最も大きな建物群のうち、4 棟ほどは東西 2.1m、南北 50.8m の細長い形状を示しており、その配置は「コ」の字状に北・東・南に並んでいました。未発掘ですが、西側にも建物が存在していたと推測され、約 60m 四方の「口」の字形に建物があつたと想定できます。

出土品などから、建物群は 8 世紀前半から半ばにかけて建つていたと考えられます。それも、奈良時代の間に何度も建て替えられて存続していたようです。また、「吉」と書かれた須恵器の坏や屋根を葺いていた軒平瓦や軒丸瓦と共に、円面硯も出土しました。硯は役人が実務のために使つたと思われ、当時のムラ跡とは考えられません。

それでは、これらの建物跡はどのような性格のものだったのでしょうか。当時、同地は河内国丹比郡の西端に位置していました。多くの建物群の配置や規模、出土品から、奈良時代の地方の役所だった可能性が高いでしょう。丹比郡の総合庁舎といえる丹比郡衙(役所)だとする意見があります。あるいは、ここが丹比郡八下郷です

ので、郷を管轄する役所(郷家)^{ごうけ}だという見方もできます。

しかし、郡衙や郷家ではなく、他の役所ではないかとする考えもあります。調査地から南 250m の所に南大阪食肉地方卸売市場がありますが、その建設の際、飛鳥時代から奈良時代にかけての大規模な運河である幅約 12m、深さ約 2 m のいわゆる丹比大溝^{たじのおおみぞ}が東西に流れていたことがわかりました。大溝から、奈良時代に祭祀を営んだ痕跡も見られました。丹比大溝という名称は、丹比地方^{たじ}につくられた運河という意味でつけられたものです。河内松原駅南側でも、同時期の大溝が見つかっています。

こうしたことから、これらの建物群は丹比大溝の管理や祭祀をつかさどる役所であったとみた方が良いという意見も強くあります。

全国的にも、奈良時代の地方の役所跡が見つかることはそれほど多くありません。また、近くの古池^{ふるいけ}(河合 3 丁目)から、奈良時代の役所と考えられる建物群も見つかっていますので、当時、河合は丹比郡の中でも官庁街の 1 つだったといえます。のち河合は、平安時代になって丹比郡から分かれた八上郡^{やみ}に含まれるようになります。

学校給食センターの北側入口と南西側には、河合遺跡の説明板が建っています。



河合遺跡説明板

58

河合・古池の発掘

飛鳥時代さおばかりのおもり出土

河合 3

河合は、市域西南端の中位段丘上に位置しています。狭山池から流れ出た西除川の中流左岸にあたり、古池、尻池、新池など大小のため池が見られます。

河合墓地付近からは弥生時代の石鏃などの石器が多数採集されています。また、古池や尻池の近辺で飛鳥時代から奈良時代にかけての大溝や奈良時代の掘立柱建物跡が検出されています。さらに、中世・近世の遺構や遺物も見られ、河合遺跡として有名です。

とくに、松原市教育委員会が平成元年(1989)、河合3丁目の古池の北東側を公園にする工事に際し、発掘調査を行いました。この時、出土した飛鳥時代後期(7世紀後半～8世紀初頭)のさおばかりのおもりは、たいへん貴重なものです。

おもりは、古池の池底や堤下から検出された奈良時代の100個におよぶ掘立柱建物群の柱穴の1つから出土しました。銅製で、高さ2.3cm、最大径2.8cmのおわん型で、重さは60.5g。頂部には高さ0.7cmのつまみがあり、ひもを通す穴が開いていました。

おもりの形態は、中国・春秋戦国時代(紀元前8世紀)以降のてんびんの分銅の系譜を引き、大陸文化の影響が見られます。

これまで古代のおもりが出土した遺跡は少なく、それも奈良市の平城京跡や島根県松江市の出雲国庁跡、あるいは郡衙跡の静岡県袋井市の坂尻遺跡のような、いまでいう首都や県庁、市役所というべき官公庁所在地にあたります。また、滋賀県高島市余呉の桜内遺跡のような交通の要地でも出土しています。なお、長崎県壱岐の原の

辻遺跡では、3世紀ごろのおもりが見つかっています。

古池で見つかった多数の柱穴から、奈良時代の建物の1棟を復元すると、梁間2間(4m)×桁行3間(5m)以上、柱の掘形は約1m、柱痕は直径約20cmを測りますので、大規模な建物群が並んでいたことがわかります。官衙(役所)的な公的施設の可能性があります。

河合をはさんで北と南には、7世紀以降の官道である大津道(のちの長尾街道)と丹比道(のちの竹内街道)がいずれも東西に走っていました。また、西には現大阪市中央区の難波宮から南へ伸びて、大津道や丹比道と結ばれたいわゆる難波大道も通っていたと考えられます。さらに、遺跡内には舟運に利用されたと思われる7世紀後半～8世紀中ごろに開削された人工運河の大溝も流れています。

交通上の要地は、しばしば政治上の要地になることから、古池で見つかったおもりは、当時の役所で役人が税として集めた品の重さを量るために使ったとも考えられるでしょう。

奈良時代、河合は本市の中心地の1つと想定されます。古池と尻池の間を走る府道大阪一狭山線は、下高野街道を踏襲する古道です。古池の発掘調査で、ため池の築造時期も鎌倉時代中ごろから後半であることも分かりました。



古池で見つかったおもり(左上)

59

井宮家と石造不動明王像

河合村の不動前 延享2年に堂・石燈籠を建立

河合6

河合6丁目の尻池北東堤に、ため池の記念碑が見られます。河合の農家の人々が昭和28年(1953)2月に建てました。この碑の真向かいにお堂があり、中に石造の不動明王立像が祀られています。「不動明王宝前」と記した花崗石の石燈籠も建てられており、裏面には風化が著しいですが、「延享二年乙丑六月吉日 河合村」と刻んでいます。

堂内に安置する不動明王像は中央で割られており、下部はもともとの安山岩製ですが、上半身はのちにつけ加えられています。自然石を残した磐石をあしらった上に整形された舟形光背を負い、体部は半肉彫されています。現高約98cm、像高は約65cmを測ります。体部の下半身周囲には火焰が渦まき、両眼を見開いた忿怒相です。右手に剣を持ち、左手には羂索を下げる通例の姿をあらわしています。もともと、頭部は巻髪をとらず細長く丸味をおび、全体に柔らかな感じをうけます。

像は、表現を簡素化した作風やのちに建てられた石燈籠に延享2年(1745)の年号があることから、江戸時代前半ごろにつくられたと推察されます。ただ、堂に安置される以前は野外にあって傷みが見られたため、採色や補修されていることが惜しまれます。

不動明王像は江戸時代に入って、河合5丁目の井宮豊和さん家の初代である速蓮院釋康専の時、井宮家の田畑から掘り出されたと伝えられています。以後、井宮家代々が祀る不動明王像でしたが、河合村の人々の信仰も集めているのです。不動明王像が見つかった場

所は、いまの河合小学校の西側で、その南には鎌倉時代にはつくられていた古池が水をたたえています。古池の北側の地は、「不動前」とよばれる小学名が残っており、不動明王像が祀られていたことから名付けられたのでしょう。

井宮家の系図によると、3代当主の昭徳院釋重貞しょうとくいんしやくじゆうていが延享2年6月に、発見した地に堂を建て、不動明王像を祀ったとあります。重貞は明和2年(1765)に亡くなりますが、のち8代当主となった釋行清しょうぎょうせいの慶応2年(1866)に、いまでも残る石造の香華台・供物台・花筒が設けられました。一部、新しく作り直されましたが、「世話人中」「慶応二年寅歳とら」の文字が刻まれています。

不動明王像を祀る堂や石燈籠などは、昭和40年代前半に現在の尻池堤に接する地に移されました。元の建立場所から西に200mほど離れた移転地は、霊場高野山(和歌山県)に向かう下高野街道(府道大阪一狭山線)に面しており、不動明王像を祀るのにはふさわしい場所といえます。

市域には、石造不動明王像の遺存はそれほど多くありません。石燈籠に刻まれた延享2年の年号や井宮家が蔵する系図や記録を通じて、その来歴がわかる本像は貴重な石仏の1つといえるでしょう。



石造不動明王像

60

河合の尻池「記念碑」

田畑を潤す命の池を顕彰 小学校4年生の授業に活用 河合6

現在、小学校3・4年生は社会科の授業で自分たちの住んでいる身近な地域について学んでいます。文部科学省が示す『学習指導要領』は、歴史的分野の内容として「地域に残る文化財や年中行事」、「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」をあげています。

このため、児童たちは、教科書とは別に地元のことが理解できるような郷土を紹介した副読本も使っているのです。『わたしたちの松原市(3・4年)上・下』という2冊の教材です(松原市教育委員会発行)。4年生が学ぶ『下』には、「きょう土を開いた人びと」があげられ、その中に「池のふしぎ発見—水とわたしたち」の項目があります。

そこで^{せつこう}恰好の教材として取り上げられたのが、河合6丁目の^{しりいけ}尻池北東堤に残されているため池改修の「記念碑」です。河合の西部を^{しもこうや}下高野街道が走っていますが、古道に西接して尻池が見られます。また、道をはさんだ東側には^{かまくら}鎌倉時代半ばにつくられた^{ふるいけ}古池があります。尻池など^{にしよけがわ}西除川筋のため池の多くは、農業生産の向上によって、江戸時代前半以降に掘削されていますので、尻池も古池だけの水では足りなくなって、新しく街道をはさんで拡張されたのでしょう。

自然石に刻まれたため池「記念碑」の裏面に、教材から引用すると、次のように建立由来が書かれています。碑は、昭和28年(1953)2月に河合の農家の方々が建てました。

ずっと昔から、古池や尻池は、田畑をうるおすための命の水でした。しかし昭和二十五年九月の台風にあってから、いろいろなどこ

ろがつぶれて、池としての働きが悪くなってしまいました。そのため、田畑はもうたがやすことができないぐらいになってしまいました。そこで農民は、みんなで力を合わせて「池のしゅう理をしよう」とちかい合いました。それから三年の長い間、いろいろなこんにんがりましたが、工事を無事終えることができました。そのおかげで、池のはたらきは、以前よりもよくなり、農民の一人一人が安心して、農業にはげめるようになりました。

このみんなで力を合わせてやりとげた工事は、大変ねうちのあることだから、協力した人達の努力をたたえ、えいきゅうに記念します。

昭和二十八年二月 田畑をたがやしている者一同

北八下村大字河合領 工事委員一同

文中の昭和 25 年の台風とは、大阪に甚大な被害を与えたジェーン台風をさします。河合が昭和 32 年、松原市に合併する前の南河内郡北八下村当時の碑で、行政変遷上でも興味深いものです。

河合の人々は力を合わせて、田畑を潤す命の源である古池や尻池を改修してきました。池づくりに精魂をこめた先人の思いを、記念碑は物語っています。次世代を担う子どもたちが水の大切さを心に刻む石碑でもあるのです。



尻池「記念碑」

61

稱念寺と河合村門徒

17世紀に本尊が下され、寺号を得た慈願寺の末寺 河合3

口に仏の名号を称え、心に仏を念ずる称名念仏は、浄土真宗では南無阿彌陀仏と称えます。同時に、称名は信心を得て、悟りを約束されたことに対する感謝報恩であると解釈されています。

こうしたことから、各地に称名寺とか称念寺と号する寺院が見られます。市域でも、近鉄高見ノ里駅から南下して、西除川を渡った河合3丁目に慈雲山稱念寺が建っています。

稱念寺は、鎌倉時代の弘安6年(1283)、源満仲の家臣といわれる多田仲光の末裔の福岡平右衛門が、八上郡河合に建立したと伝えています。もともとは真言宗でしたが、江戸時代前半、東本願寺14世琢如(1625～71)の時に浄土真宗に改宗し、以後、東本願寺を本山とする真宗大谷派に属しています。

同寺は、江戸時代を通じて八尾の慈願寺の下寺となっていたことから、慈願寺に残る文書から近世の様子がうかがえます。慈願寺は、戦国時代以降、摂津・河内・大和に浄土真宗の教線を広げ、江戸時代には市域でも稱念寺以外に、良念寺(松原村新堂)、福應寺(松原村上田)、安養寺(阿保村)、不退寺(小川村)、妙心寺(大塚村)を末寺としていました。

慈願寺文書によると、「八上郡河合村稱念寺」には、寛永7年(1630)8月26日、住職宗有の時、本尊の木佛である阿彌陀如来像が本山より下付されました。以後、貞享2年(1685)までの間に、太子七高祖と琢如上人絵像が住職了玄の時、次いで親鸞聖人絵像が住職宗甫の時に下され、いまも本堂に祀られています。

また、同じく宗甫時代の貞享2年9月15日、河合村の門徒たちは稱念寺という寺号をつけたいという願いを本山の東本願寺が許可したので(『寺号御免状』)、そのお礼の志として「白銀四拾四しよ双」を納めています。

河合村門徒の中には、江戸時代中ごろ、慈願寺住職の任命にあたって影響力を持っていた有力者もいました。宝暦2年(1752)6月の『河州若江郡八尾慈願寺門徒惣代印形』には、河合村伊平治など各村90名の門徒惣代が後継住職選びに名を連ねていますが、伊平治はその筆頭惣代でした。いまも、西除川沿いの河合墓地(河合1丁目)には、稱念寺住職などの墓石と並んで、宝暦年間前後の門徒たちの墓石が何基か残っています。この30数年後の寛政元年(1789)、河合村の檀家は16軒を数えました。他にも、享和2年(1802)1月には、稱念寺住職の次男である観了(13歳)が慈願寺の役所としての仕事を取り仕切っていた近くの専徳寺の留守居になったという記録も残っています。

享保7年(1722)に建てられた本堂は、天保13年(1842)に改修されています。昭和に入って2度修復された後、平成3年に新本堂が完成しました。



稱念寺

62

河合神社と八上郡

北八下村の変遷

河合 3

本市南部やその周辺には、丹南・丹上・丹下・多治井(丹比)などの町名が見られます。これらの地名は、当地が8世紀前半ごろに設けられていた河内国のうち、丹比郡に含まれていたことに由来します。丹比郡は、やがて平安時代後期に丹北・丹南・八上の3郡に分割されました。その後、明治31年(1898)になって丹北郡は中河内郡、丹南郡・八上郡は南河内郡に改編されます。その際、市域の大部分は丹北郡でしたので中河内郡になりましたが、市南部の丹南は丹南郡、市南西部の河合は八上郡のため南河内郡に属しました。

このうち、市域の歴史で、八上郡についてはあまり触れられません。これは、八上郡の大部分が現在の堺市北東部にあたるからでしょう。旧の北八下村・南八下村・金岡村の地域です。大泉緑地近くには、北八下小学校・八上小学校とか八下中学校という校名の学校が建っています。河合は、北八下村の北東部を占めており、北八下村は中・野遠・南花田・河合で構成されていました。河合を除く、3地域は堺市となりましたが、河合は西除川水系で高見や布忍などとの関わりが強いこともあり、昭和32年10月に松原市に合併されました。

西除川左岸の河合は、弥生時代の石器が数多く出土したり、飛鳥時代から奈良時代の大溝や掘立柱建物などが検出されるなど、古くから集落が形成されていたり、あるいは役所的な施設があったようです。

史料の上では、豊臣秀吉が天正11年(1583)8月1日に福島正則に与えた知行の一所に「河州八上郡内河合郷」と見られるのが有名でしょう。天下人を目指した秀吉が支配した地域に施行した太閤検

地の目録です。さらに、秀吉は文禄3年(1594)11月、長束正家を檢地奉行として河内国で太閤檢地を行いました。いわゆる文禄の檢地です。河合でもこの時の太閤檢地帳が残っており、『八上郡内河合村御檢地帳』とあります。なお、文禄の檢地帳が現存するものは少ないのですが、本市には河合以外にも、更池・東代・我堂・堀・城連寺・三宅・別所・岡の9カ村に残っています。

河合集落の南側には、氏神の河合神社(河合3丁目)が祀られています。同社は、江戸時代中期の元文5年(1740)8月16日、「牛頭天王宮」と刻まれた手洗石が残っているように、素盞鳴命を主神としています。近代に入って、明治政府は神社合祀策を断行します。この結果、河合神社も他の旧八上郡内の神社と同じく、明治41年(1908)4月23日に金岡村(堺市北区)の郷社であった金岡神社に合祀されることになりました。以後、河合は金岡神社の氏地となり、金岡神社の宮司が祭祀を行うようになったのです。

もともと本殿は南向きでしたが、現在、社地には東向きの本殿や鳥居が新築され、祭神も戻されています。また、10月の秋祭りには雄壮な「だんじり」が町内を巡行し、地域の人々の結びつきを強めています。



河合神社

63

松原市民運動広場と清堂遺跡

古代から中世の「松原」は「マツ」原ではなく「カシ」原 岡7

岡7丁目の国道309号線西側に松原市民運動広場があります。

この地は、東に大きく蛇行した西除川の氾濫原に面した沖積段丘の縁辺に立地しています。東側には王仁の聖堂伝承で知られる清堂池から流れ出る清堂川が西除川に合流しています。

周辺ではこれまでも遺跡が見つかっていましたので、グランド造成前に発掘調査が行われ、縄文・弥生時代から古墳時代、その後、断絶はあるが、平安時代後期から鎌倉時代の遺構や遺物が検出されました。

縄文・弥生時代のものとしては、石鏃などの狩猟具・土器や、石器制作の過程でできる剥片が多量に見つかりました。狩り場であると共に、近くに集落があったことが推定されます。古墳時代では、4世紀末から5世紀の土師器と共に、溝や井戸が見つっています。やはり集落があり、水田耕作の遺構であると考えられます。

平安時代後期から鎌倉時代になると、何度か建て替えられた掘立柱建物が数十棟検出され、それらの建物は溝によって区画されていました。建物はそれぞれ井戸を伴っており、素堀り井戸もあるが、多くは曲物を井戸枠として転用しています。建物の西側には水田が広がり、灌漑溝も見られました。瓦器塊・皿・羽釜などの日常雑器のほか、陶磁器、唐草文・巴文などの文様のある瓦が大量に出土しています。とくに、青磁・白磁など中国からの輸入磁器が多いことが注目されます。

鎌倉時代を過ぎると、集落は検出されず、以後、水田や畑・雑木林となっていきました。この地から南へ西除川沿いの岡7丁目から清堂池南側の岡1丁目あたりまでは清堂遺跡とよばれています。

ところで、清堂遺跡に限りませんが、隣接する北部の上田町遺跡^{うまだまちょう}など市内の遺跡の古代から中世の風景を復元すると、興味あることがわかりました。地中に埋まったままの樹木や草花の花粉をとり出してみると、自然に茂った照葉樹林のカシ類がほとんどでした。

松原の地名の由来が「松生いし丹比の松原」^{ほんげの たじりしげ}（反正天皇の丹比柴籬宮^{さいのみや}が、天皇崩御後、荒れはて松林となった）とよばれるように、古代以降、市域には松林が繁茂していたと考えられています。ところが、意外にも「マツ」原ではなく「カシ」原だったのです。

もちろん、カシの林だけではなく、モザイク的にシイやスギ、もちろんマツも生えていました。しかし、清堂遺跡や上田町遺跡などの調査でわかったように、カシの林が広範囲に広がり、集落や水田（イネ類の花粉もたくさん見られます）が混在する景色だったのです。

それが近世直前から、カシやシイなどの照葉樹林が減っていき、マツやクスなど人々の手になる植林によって里山や薪炭林に変わっていったのでした。運動広場の外周 600m のウォーキングコースにはクス・アラカシ・シラカシ・クヌギ・シイ・ニレ・スギ・ケヤキ・マツ・ヤマモモなどが植えられ、市民の憩いの森となっています。



松原市民運動広場

64

地域医療に貢献した井岡氏

井岡元二・元喬・公保・忠雄と医家・薬屋の活動

新堂 5

にしよげわ
西除川沿いの新堂5丁目に新堂墓地があります。その無縁墓南側に江戸時代後半以降、昭和20年代まで松原村新堂に住んだ医家の井岡氏の墓石が大小十数基見られましたが、最近、改葬されて更地になっています。融通念仏宗の浄光寺(新堂3丁目)の檀越として、明和年間(1764～71)に寺に什物を寄進した井岡理安夫妻など18世紀後半の宝暦・安永や寛政年間のものも残っていました。その墓石群西隣に「井岡荆庵墓」がひときわ目立っていました。荆庵は名を公禮、字は達夫、通称元二と名のり、荆庵とは号です。理安の子で、天保2年(1831)、浄光寺本堂再建に尽力した元喬の父でした。文政12年(1829)正月18日、75歳で生涯を閉じています。

文政6年(1823)の『続浪華郷友録』という人物志に、井岡元二が河内の有名な医家として載っています。市域では、寛政2年(1790)の『浪華郷友録』に津屋の名医、北山橘庵・元恭・元寧の名が見られました。元二の事績を記した墓碑銘には、北山氏の影響を受けたことも触れています。

元二の医業は、子の元喬が受けつぎました。元喬は松原だけでなく、富田林の仲村家のかかりつけ医でもありました。酒造家の仲村家に残る『年中録』と題する幕末の天保期から安政5年(1858)にわたる家の日記に元喬の往診のことが記されています。

『年中録』によると、嘉永元年(1848)、瘡癤が流行していたこともあって、当主仲村徳兵衛に煎薬334服267匁、人參・丸薬19匁を調合しています。嘉永3・4年や安政2年(1855)・翌安政3年

にも元喬の診察があり、妻ゆうや祖母もみえています。

この時期、井岡家は薬屋として薬の調合も行いました。同家は、現大阪市平野区の平野組という薬種仲間に属していました。元喬は安政5年2月、71歳で亡くなりますが、子の公保は慶応4年(1868)の『薬種屋・合薬屋名前帳』に平野組所属として載っています。『名前帳』には、市域では井岡氏以外に三宅の中務瑞龍・大橋此右衛門・樋口重蔵・吉川左中、東代の森田庄兵衛・山田卯兵衛、新堂の良念寺、一津屋の北山文之進、立部の黒川謙蔵、阿保の保田仁兵衛らの名も見られます。

公保が明治6年(1873)10月、44歳で亡くなった2代後、明治12年(1879)生まれの忠雄が当主となりました。医学博士で産婦人科医の忠雄は大正9年(1920)4月7日、「井岡家累代之墓」を建て、墓碑に同家の由来を詳しく書いていました。

忠雄は大阪赤十字病院創立の明治42年から昭和17年まで同病院に勤め、副院長にまでなりました。浄光寺前にあった井岡家はいまでは残っていませんが、同病院東入口には、井岡家の庭に置かれていた青銅製ライオン像が、遺族によって寄付され、井岡家をしのぶ遺物となっています。



新堂墓地の旧井岡家墓石 ※いまは更地となっている

65

松原村新堂の大工利助

藩主秋元但馬守が命じた愛染院修復と雄略陵普請

新堂 5

江戸時代後半から末期にかけて、松原村新堂に2代にわたって利助と名の棟梁大工が住んでいました。この時代、岡・上田を含む松原村は秋元氏の領地でした。川越藩主(埼玉県)だった秋元氏はのち山形藩主へ、さらに幕末には館林藩主(群馬県)へと移りますが、市域をはじめ、いまの堺市東部や羽曳野市西部など河内国の丹北・丹南・八上郡の43カ村も領していたのです。

秋元氏は、河内では八上郡南花田村の真言宗・愛染院(堺市北区蔵前町)を祈願所としていました。愛染院は、奈良時代に行基が建てたと伝え、戦国時代の兵火で一時衰えましたが、江戸時代に堺の人々や秋元氏の協力で再興されました。本堂の観音堂は慶安5年(1652)の建立ですが、文化2年(1805)に大規模な修理が施されました。

愛染院は、もともとは池浦観音寺とよばれており、文化2年の修理時の棟札が、同寺に保存されています。棟札には「池浦観音寺大檀越秋元但馬守 権大工松原新堂利助 文化二乙丑年十一月」などと墨書されています。

秋元氏は但馬守を称する藩主が多く、この時は8代永朝でした。寺の保護者として、その再建を新堂の大工利助に託したのです。間口3間の本堂正面の梁に見られる彫刻や棟木を支える墓殿の端正な形を残しながら、利助は藩主の期待に応えました。本堂は、堺市の指定文化財になっています。

天保2年(1831)、利助の檀那寺であった融通念仏宗の浄光寺(新堂3丁目)本堂が再建されますが、これを指揮したのも利助でした。

本堂完成にともない、利助は銀 550 匁^{もん}を寄付しています。いまのお金で 200 万円ほどでしょう。

浄光寺には「大工利助」として、家族の過去帳が残されています。また、新堂墓地(新堂5丁目)入口東側には、戒名と共に「松原村之内新堂 伊都利助 天保十四癸卯九月建立」「門弟中」の墓石も建っています。利助は伊都氏、あるいは伊藤氏と名のついていません。天保14年(1843)に亡くなり、弟子たちが建立しました。

その子も利助の名を継ぎますが、彼も腕のよい大工でした。元治元年(1864)、10代藩主秋元志朝^{ゆきとも}は領内の丹南郡南島泉村(羽曳野市島泉)に所在した雄略天皇陵^{ゆうりやく}を修復することになりました。江戸幕府が行った幕末の修陵の中でも、雄略陵は神武天皇陵^{じんむ}や応神天皇陵^{おうじん}に次いで、大がかりな工事でした。秋元氏は、大工請負を利助に命じて拜所の神明鳥居や櫓などをつくらせました。利助が、新堂の庄屋芝池助一郎^{しばいけすけいちろう}と連名で、館林藩の役人や丹北・丹南・八上郡の大庄屋に宛て、工事の有様を記した文書が残っています。

江戸時代後半以降、新堂在住の何人かの大工が寺社や庄屋家を普請した史料が見られますが、その代表的な大工が利助家であったことはいうまでもありません。



伊藤利助墓

66

新堂の中野好松と芝池経太郎

第1回村会議員当選と初代松原村長

新堂3・5

中高野街道が新堂公民館前を通る住吉道と交差する新堂3丁目に、天保5年(1834)の高野道の道標が建っています。道標の北東側には、中野敬さん宅があり、自然石が見られます。表面に中野好松翁「新堂総中 寄附」、側面に「釋宗説 明治四十五年四月」と刻んでいます。

中野好松は、文久元年(1861)7月30日、丹北郡松原村新堂で生まれました。好松は、阿保・西大塚・西野々・上田・新堂・立部・岡・高見の里・田井城から成る松原村の村会議員を21年間にわたって務めた人物です。わが国では、明治22年(1889)4月に町村制が施行され、丹北郡松原村が誕生しました。明治31年(1898)6月には、郡制統合で、松原村は中河内郡に含まれるようになりました。

好松は、明治22年4月28日に行われた第1回松原村選挙で当選し(定員6名)、25年(1892)4月13日の半数改選で退任するまで、3年間の任期を務めました。そして、翌14日に行われた改選で再選され、31年4月13日の任期満限までの6年間に及びました。続く、31年4月21日の選挙で、3たび選ばれ、37年(1904)4月20日の任期満限まで6年間続けました。さらに、翌21日の選挙でも当選し、43年(1910)4月20日の満期まで務めたのでした。

好松は、議員になる前から教育に熱心で、同じ新堂出身で村会議員となる中野駒蔵と図って、上田にあった松原小学校を校区(上田・新堂・立部・岡)の中央にあたる新堂・浄光寺の東北側に移し、新堂小学校と改名しました(明治20年4月)。そして、学校に行けない子供たちのために、自宅を開放して、手習いや習字も教えました。

好松は、議員を退いた1年余後の明治44年(1911)6月、50歳で亡くなりましたが、新堂の人々によって、翌45年(1912)4月に顕彰碑が自宅に建てられたのです。

一方、好松が村会議員であった明治22年から42年の20年間は、同郷新堂の芝池経太郎(弘化4年10月15日生)が初代松原村長に就任以来、連続5期にわたって務めていました。芝池家は浄光寺に隣接しており、江戸時代、新堂村の庄屋でした。芝池は42年8月4日に亡くなりますが、好松ら松原村議員は、長きにわたる芝池村長の功績をたたえ、同42年9月20日、新堂墓地(新堂5丁目)南西側に建てられた経太郎の墓の台石に「松原村」の名を刻むと共に、墓石にも「村会議建碑」の文字を入れ、碑文をしたためています。

ちなみに、昭和22年(1947)4月の戦後まもなくの選挙で松原町長となったのは、同じ新堂出身の浅田義守でした。浅田の墓石の横に「標碑」が建てられていますが、それを撰文したのが、大阪の泊園書院塾生であった瓜破(大阪市平野区)の全田直一と、のち松原に住んだ次男の肥下恒夫でした。書は、のちに内閣総理大臣となった幣原喜重郎です。309号線近くの住吉道観音橋沿いに建っています。



中野好松顕彰碑



芝池経太郎墓石

67

「河内音頭 岩井富丸碑」

音頭取り新堂・伊藤富松の「河内十人斬り」

新堂 5

♪エーエンさアアてはーアアー ーイ座アアの皆さまえー♪で始まる河内音頭に乘った盆踊りが、夏の風物詩として各地で催されます。

河内音頭は、明治初期に北河内の音頭取り歌亀うたかめが始めた節から形が整ったといわれています。ただ、現代のように大太鼓に合わせたりズミカルなものではなく、地域ごとに節回しや文句も違っていました。

明治26年(1893)5月、南河内郡千早赤阪村水分みづんで「河内十人斬り」とよぶ、地元の男性2人が10人もの男女を斬殺した事件が起こりました。この時、富田林警察が捜査にあたったことから、署長の人力車夫であった内田梅吉うちだ うめきちは、署長を乗せてたびたび現地を訪れていました。梅吉は、富田林市川西新家字岩井しんけいあざに住む音頭取りとしても有名でした。そこで、この事件を同じ音頭取りでもあった河内長野市西代の松本吉三郎にしのだい まつもときちさぶろうに話して台本を書いてもらい、梅吉節ともよばれる江州音頭を改良した節回しで始めたのでした。話し言葉を早口で読み、「サー」「アイサー」なども接続詞的に織りこんでいます。

梅吉は、生地の小字名を取って岩井梅吉と名乗り、翌6月から大阪・道頓堀の芝居小屋などで「河内十人斬り」の興業を行い、大人気を博しました。梅吉節は、大衆に長く愛され、やがて堺市東区日置荘ひしやう かげしでちかげまゐの東口竹丸が2代目岩井梅吉を名乗り、そして、大正期に3代目岩井梅吉を継いだのが松原村新堂の伊藤富松いとうとみまつだったのでした。

富松は、融通念仏宗ゆうつうねんぶつの浄光寺じやうこうじ(新堂3丁目)しんたう さんぢやうを檀那寺としていた伊藤好姿いとうよしまつの長男でしたが、家を弟に譲り、音頭の世界に飛びこんだのでした。富松は、梅吉節に惚れ込み、岩井富丸いゑみまるの芸名で活躍しました。

現在、松原小学校が建つ場所は、新堂しんどうの下したの池いけが水をたたえており、昭和前期まで池東側の土堤の北（上田5丁目）に芝居小屋がありました。富丸は、ここで「河内十人斬り」を目玉とする常設の音頭興行を行ったのです。当時、わが国はドイツとの第一次世界大戦（1914～18）に参戦していましたが、富丸は、紀淡海峡きたんにのぞむ和歌山市深山みやまに設けられていた守備陣地を慰問したこともありました。

大正10年（1921）6月、音頭仲間たち有志は、新堂墓地（新堂5丁目）の中央通路東側の伊藤氏墓域に富丸碑を建立しました。「河内音頭岩井富丸碑」と正面に刻み、基礎石に「有志中」とあります。手前の香華台こうげには「伊藤」の名を記しています。

富丸は、昭和2年（1927）7月3日に亡くなりました。50歳前後だったといわれています。浄光寺に「新堂住人」の添書と共に、富丸の命日と、「大融浄音信士 富丸」という戒名が過去帳に残っています。富丸は、上田の興行小屋の南側、中高野街道沿いの自宅から「岩井富丸碑」の伊藤家墓所まで野辺送りされ、土葬で祀られました。

富丸らの河内音頭は、いまでは伝承河内音頭保存会・宗家岩井会そうけと名乗り、8代目岩井梅吉さんによって、河内長野市に本拠を置いて守られています。



岩井富丸碑

68

弘法大師空海の惣井戸伝説

高見村の信田喜右衛門が清水の湧く井戸を掘る 高見の里 3

平成 27 年 (2015) は、弘法大師空海が紀州 (和歌山県) の高野山を開いて 1200 年になります。現在、多くの人々が空海ゆかりの四国八十八ヶ所を巡るなど、大師信仰は現代人の心をやすらげる原点となっているかもしれません。

この大師信仰から、各地には空海と結びついた数々の伝承が残っています。本市にも、中高野街道や下高野街道が南北に通っていることもあり、空海が河内方面を訪れただろうと願望され、その中で空海の惣井戸伝説が伝えられています。

高見の里 3 丁目の高見神社の南、南宮の池の東側住宅地の一角に井戸が残されています。地表の井桁は整形された花崗岩で、凸状につくられた 4 枚を上下交互に組み合わせています。北面と東面に「天保八年九月 高見村惣井戸十三忌志 釋淨恵 施主信田喜右衛門」と刻まれています。江戸時代後期の天保 8 年 (1837) 9 月、高見村の信田喜右衛門が釋淨恵の 13 回忌の供養として、村人が利用できる共同井戸としてつくったことがわかります。

地表下の井筒は、もともとは円形に瓦で囲っていましたが、いまではコンクリートで補修されています。地面も石敷でていねいに覆われ、飲み水や炊事などの利用と共に、村人の寄りあいの空間でもあったでしょう。もっとも、いつのころからか高見村の人々はこの井戸は天保年間に掘られたのではなく、遠く平安時代初期に空海がつくったと伝えるようになりました。

各地に足跡を残す空海が高見村にも来たというのです。この時、

空海はのどがかわいたので何軒かの家に入り、飲み水を所望しました。しかし、いずれも家人たちは身なりの貧しい僧侶の姿を見て断りました。しかたなく、空海は畑の中にあった井戸を探しましたが、ひどい悪水でした。ところが、空海がその井戸水を飲むと甘露な清水に変わったといえます。これが伝説の惣井戸です。反対に、水を飲ませなかった農家の井戸は、赤茶色のかなげ水になってしまったということです。

また、別の伝承によると高見村は水の便が悪く、飲み水に困っていました。空海はこれを哀れみ、携えた錫杖しやくじょうで地面をついたところ、清水が湧き出したともいわれています。

弘法井・弘法清水説話は、空海伝承の中でもポピュラーなものです。荒唐無稽こうとうむけいなものが多いのですが、空海の多彩な社会事業が裏づけとなって伝承化されたものでしょう。

惣井戸を寄進した信田喜右衛門の旧宅は、すでに見られませんが、いまの高見の里3丁目の敬念寺かうねんじ（真宗大谷派）の東、高見会館のところにありました。また、喜右衛門の墓は一族の墓石と共に、西除にしよげ川沿いの高見墓地（高見の里6丁目）を入った左側（南東側）に祀られています。



空海の惣井戸

69

国の登録文化財の田中家住宅

明治時代初期に建てられた主屋 高見の近代化 高見の里3

高見神社(高見の里3丁目)の参道筋に面して田中家住宅があります。塀に囲まれた主屋は、明治5年(1872)ごろに建てられました。当時、この地は丹北郡高見村でした。

主屋は町家風の平屋建てで、入母屋造、瓦葺き。桁行10間半(うち土間5間半)、梁行4間半です。居室は整形4間取りで、土間囲りが広くとられています。座敷や仏間には、江戸時代後半に描かれた「皓月永春重信」の落款のある「雪中鷺の図」や、同時代の「四季耕作図」が襖絵として、いまでも残っています。

他に、北側が入口となる長屋門、主屋南側に建つ二階蔵、東側の離れ、また、北側と西側を囲む塀も明治時代初期の主屋に付属して建てられていきました。とくに、通りに面した塀には虫籠窓風の開口がしつらえられていて、街路景観を整えています。

こうした貴重な明治初期の民家建築から、平成18年(2006)8月、田中家住宅は国の登録有形文化財となりました。

江戸時代、田中家当主の多くは、元右衛門を名のりました。いまでも、西除川に沿った高見墓地(高見の里6丁目)には、江戸時代後半から幕末にかけての文化、文政、文久年間の「高見村 元右衛門」などと刻した墓石が数基祀られています。幕末から明治初年ごろの当主も、元右衛門(戸籍上は元重郎とする)でした。現主屋は、元重郎時代に建てられたものです。

元重郎は、明治7年(1874)に亡くなりますが、そのあとを継いだのが左逸でした。左逸は、安政6年(1859)、八上郡野遠村(堺市北

区野遠)の野村家に生まれ、のち元重郎の娘シマの入り婿となったのです。左逸は地域の発展を願い、実現しませんでした。高見などを縦断する狭山鉄道の計画に積極的に参加しました。現在、田中家住宅北側に「田中左逸翁記功碑」「大正十五年五月 高見」と刻された顕彰碑が建立されています。左逸はこれを見届けた2ヵ月後の同年7月、67歳の生涯を閉じたのです。空海くうかいの惣井戸そういど伝説をもつ井戸を掘った信田家しのぶの高見墓地墓所の横に田中家の墓域があります。

大正11年(1922)、現在の近鉄南大阪線ぬのす(布忍～道明寺間)が開通しました。当初、高見には駅がなく、布忍と河内松原駅間はため池と一面の田畑の中を電車が走っていました。

昭和2年(1927)、線路北側に新しく高見ノ里園芸住宅とよぶ住宅地が開発されることになりました。昭和7年(1932)には帝国女子薬学専門学校(現大阪薬科大学)も高見の南隣りの北八下村河合きたやしも(松原市河合)に北河内の守口から移ってきたこともあり、高見ノ里駅が開業したのです。駅舎やホームの一部は、田中家の土地でした。

現在では、高見から高見の里へと地名が変遷していますが、新住宅・学校・新駅が出来たことで、高見の村が近代化に向かっていったといえるでしょう。



高見の里・田中家住宅 ※非公開です

70

高見神社と「ええじゃないか」

神明社で乱舞した昭和天皇御大典での祝い

高見の里3

「ええじゃないか ええじゃないか お前も吸いつきゃ わしもたこ 互に吸いつきゃ ええじゃないか」。昭和3年(1928)、昭和天皇が即位の礼をあげられた御大典ごたいてんを祝って、松原村高見の人々は、幕末におこった「ええじゃないか」を再現し、驚喜して乱舞しました。「ええじゃないか」は、慶応3年(1867)から翌4年にかけて伊勢神宮の御札みはだなどが降り、歌詞に「ええじゃないか」とはやしをつけて、集団で町や村を踊り歩いた現象です。

高見の里3丁目の田中信治さん(明治39年生、故人)は、松原市郷土史研究会編『松原市の史蹟』(昭和47年)の高見の項で「今上天皇の御大典祝賀に、老若男女が高見台案たいあんと共に、“ええじゃないか ええじゃないか”と乱舞したことをいまでも覚えている。(中略)慶応3年は王政復古令おうせいふこけいが出て、倒幕派たうぼくの活動が盛んな時であった。このため、治安の混乱をきたし、大衆は伊勢神宮の御蔭参りおかげまゐりや“ええじゃないか”と乱舞して、エネルギーを発散させた。当時のことを知っている人々が、御大典の時にも“ええじゃないか”を歌ったものと思われる」と述べられています。

「ええじゃないか」は、高見の里3丁目に鎮座する高見神社境内が舞台となりました。高見神社は高見村の氏神で、いまでも宝暦12年(1762)9月や文政5年(1822)正月の石燈籠が見られます。

同社の祭神や由緒はよくわかりませんが、「シンメイ」様とよばれていますので、天照大神や伊勢神宮を奉斎ほうさいした神明社しんめいじやであったと推測されるでしょう。「シンメイ」様は女神で、夜は柴籬神社しばがき(上田

7丁目)に行かれ、朝方に高見神社に戻られると伝えられています。

江戸時代、人々の伊勢参りが盛んになり、参宮を目的とした伊勢講しんめいこうや神明講などが各地につくられました。高見にも、伊勢講が昭和初期までありました。それと共に、神明社も勧請されたと思われます。また、氏神社境内に伊勢神宮いせじんぐうの遥拝所ようはいじよが祀られ、柴籬神社にも遥拝所が現存しています。

高見神社は、昭和60年(1985)に拝殿や鳥居などが再建されましたが、鳥居の南側に建つ昭和7年(1932)11月の「高見在郷軍人」「行幸記念」の2基の石碑が目にとまります。

昭和7年、河内平野一帯で陸軍特別大演習が行われましたが、この野外統監部に高見に南接する北八下村河合きたやしも(現、本市河合)にあった帝国女子薬学専門学校(のちの大阪薬科大学)が決定されました。天皇も行幸される予定でしたが、結局は実現しませんでした。しかし、参謀総長の閑院宮載仁親王かんいんのみやこころいとしんのうなど皇族方が視閲したことから、高見の在郷軍人の方々が中心となってこの記念碑が建てられたのです。

境内をおおうクス・エノキ・イチヨウいちじゅは、鎮守ちんじゆの杜もりの貴重な巨木です。また、境内西側・南側に見られる池は北宮きたみやの池いけ・南宮みなみやの池いけとよんでいます。



高見神社

71

郷土芸能 高見台楽の復活

太鼓屋又兵衛に連がる全国ブランドの大太鼓

高見の里 3

「ヤレーヨーイー 高見はなれてドン ドン 早や 追分や ド
 ンドンードンドン 向ふにナ見へるわ ソーレワサ 布忍橋 ソ
 レヨホホイ ヨホホイ ヨイ ヨイ ヨイ」

昭和 55 年 (1980)10 月 10 日、高見の里 3 丁目の高見神社の秋祭りに、昭和初期から途絶えていた高見台楽が半世紀ぶりに復活しました。台楽とは大神楽のことで、神様に奉納する神舞がもともとのおこりです。スローテンポの歌の中に、地名をおりこんだ人々の生活の息づかいが感じられます。

高見台楽は、4 本の丸太を井形に組んで直径 90cm、長さ 1.1m の大太鼓を乗せ、その上に直径 2m の花がさを飾っています。これをねじりはち巻き、ハッピー姿の男衆が前後 18 人ずつでかつぎ、その後ろを女性たちが太鼓の音にあわせて、歌いながら、町なかを練り歩くものです。

太鼓は、このあたりでは珍しいほど大きく、堂々としています。もともとは、高見神社の北側にある真宗大谷派の敬念寺太鼓楼に安置されていました。高見台楽は、豊作を祈って催されたと伝えられています。いつから始まったかはよくわかりません。しかし、ケヤキの原木をくりぬいた太鼓の胴の化粧や牛皮の張り替えごとに胴の中や端に、その時の修理年や修理者などが書き込まれています。

それによると、大太鼓は江戸時代末期の安政 2 年 (1855) につくられたと記されています。その後、昭和 6 年 (1931) に現在の JR 環状線芦原橋駅の南側にあたる大阪市浪速区浪速東 (旧、摂津国西成

郡渡辺村)の岩田屋又兵衛いわた やまたべえによって修理されました。

江戸時代以降、現在に至るまで渡辺村を中心とするいまの浪速区芦原橋・大国町周辺は皮革づくり・太鼓づくりの町として知られています。現在、浪速東3丁目の浪速玉姫公園なにわたまひめの地は、江戸時代を通じて全国ブランドとなった太鼓屋又兵衛の屋敷があった場所です。太鼓屋の屋号は、渡辺村の平八が元和2年(1616)、大坂城の「時太鼓」をつくった功績によって命名を許されたと伝えられています。岩田屋又兵衛は、この太鼓屋又兵衛家に連がる太鼓屋でした。

昭和55年9月、復活高見台楽のため、今回も牛皮が芦原橋の太鼓屋たいこまさの太鼓正によって張り替えられました。太鼓屋又兵衛家は、いまでは無くなっていますが、この地に根づいた和太鼓業者によって、高見台楽の太鼓は伝世されました。

高見台楽はその後も続けられましたが、昭和62年(1987)を最後に再び中断されました。いまでは、大太鼓をはじめ井形や花がさは高見神社境内に建てられた「郷土芸能高見台楽保存会格納庫」の中に納められたままです。

市内に残る貴重な郷土芸能が再び復活されて、地域の結びつきがますます深まることを期待したいものです。



高見台楽

72

高見村惣道場の敬念寺

正徳3年の棟札が語る真宗寺院

高見の里3

高見の里3丁目（高見の里）に敬念寺（敬念寺）が建っています。同寺は真宗大谷派で、恵日山（恵日山）と号します。戦国時代の天文元年（1532）に創建されたと伝え、河内国丹北郡高見村（高見村）の惣道場でした。敬念寺には、江戸時代中期（江戸時代）の正徳3年（1713）5月3日付けの棟札が残っており、本堂がその時に再建されたことがわかります。

もともと、村々の浄土真宗の本堂といえどもその多くは、茅葺きやわら葺きの民家とそれほど変わらない建物でした。それが、18世紀中期ごろから瓦葺きとなり、組物や虹梁（虹梁）などを採用して、いま見られるような寺院建築へと進んだようです。

本堂内の本尊の阿弥陀如来像を祀る仏壇も、最初は1列あるいは3つが並ぶ仏壇でしたが、18世紀後半ごろから現在のように内陣に後門を設ける出仏壇へと移っていきました。敬念寺本堂も、もとは3つ並び仏壇でしたが、のち、出仏壇になったことが再建時の解体調査で判明しています。

ところで、この棟札は当時の看主（看主）（道場主の僧、住職のこと）である恵賢（恵賢）が記したものです。それによると、「河州丹北郡高見村敬念寺は浄土真宗の道場として往古よりの佛閣たり」と書き始めています。次いで、豊臣秀吉が天下取りに進んでいた文禄3年（1594）、検地奉行の長束正家が行った太閤検地で、敷地は租税を免除されて除地になったとあります。やがて、江戸時代前半（江戸時代）の延宝年間（1673～80）、本山の東本願寺15世常如によって敬念寺の寺号が許され、「斯の如く相続して正徳三年五月二再建する所也」と結んでいます。

この時の作事者は、棟札に「大工棟梁藤原氏村田喜左衛門安次、藤原氏村田安右衛門好廣、藤原氏伊藤文左衛門宗次」と書かれています。彼らは高見村の隣村である松原村新堂の人で、藤原氏を名のるなど、平大工を統率する棟梁大工でした。江戸時代、現在の新堂には新堂組という大工集団が住んでおり、地元松原の寺社をはじめ、各地の建築を請け負ったことが知られています。

恵賢が記した棟札は、高見村庄屋の茂兵衛や年寄の吉右衛門・傳右衛門によって当時の大坂町奉行所の北条安房守と甲斐飛弾守、および高見村の領主であった旗本の小出主計あてに書かれたものです。ちなみに元文2年(1737)の史料では、この頃、小出氏は高見村の他、城連寺・池内・芝・我堂・堀・高木・清水・更池・向井・田井城の各村々も支配していました。

また、本堂正面東側の大太鼓をおさめた太鼓楼も寺観を添えています。この建物にも明治12年(1879)5月の再建棟札が残っており、建立時期がわかります。

なお、市域でも現存最古級の1つであった正徳3年に建てられていた本堂は、耐震工事などをほどこして平成22年に新しく建て替えられました。



敬念寺

73

市内最古級の追分地藏尊道標

高見に祀られる天和2年道標

高見の里 3

江戸時代中ごろ以降、庶民が旅を楽しむようになって、各地の社寺参詣路は整備されていきました。同時に、旅人に道のりや方向を教えてくれる石造の道標も17世紀ごろから見られるようになり、18世紀に入って数多く建立されました。

市域には、東西に長尾街道^{ながお}や竹内街道^{たけのうち}、南北に中高野街道^{なかこうや}・下高野街道^{しも}が通っていますので、江戸時代の道標が15基ほど残っています。もっとも、道路の拡張などで取り壊されたりしているのです。実際はこの数を上回るでしょう。市民ボランティアの研究団体である松原の郷土を知る会では、市内の道標をくまなく調査し、一般の人々にもわかりやすい『まつばら歴史さんぽ 道しるべ紀行』を発売しています(2013年・2015年改訂版)。

堺から東進する長尾街道が、近鉄布忍駅南側の踏切を渡り、高見の里の学園通りから北進する道と交差する手前、東新町4丁目と高見の里2丁目の境界で右(南東)に斜向する道とに分かれます。ここは江戸時代、追分の地で、斜向道路は住吉道^{すみやちみち}ともよばれ、高見の里から新堂^{にいどう}に入って、中高野街道に通じるバイパスでした。

追分には松林が茂り、茶屋が設けられていました。ここに、花崗岩で舟形地藏を利用した道標がありました。正面中央に地藏菩薩立像が浮彫りされ、その下部に2段で「天和二壬歳七月十日」、右縁に「右はせ よしの」、左縁に「左なら ふじいでら」と刻んでいます。右へ住吉道を経て、中高野街道を行くと大和の長谷寺(桜井市)や吉野(吉野町)へ、左の長尾街道をそのまま進めば奈良や葛井寺(藤井

寺市)へと導いてくれます。天和2年(1682)は、市内でも最古級です。また、道標に地藏像を刻むものが多いのも、市内道標の特色です。

明治時代、追分地藏尊道標は同地から南東へ線路を越えて300mほど離れた高見の里3丁目の敬念寺(真宗大谷派)の門前に移されました。2体安置された地藏尊のうち、天和2年道標は右側のものですが、地藏の真ん中が横一直線に割れています。

なぜ割れたかという、馬をお伴にした馬主が馬を追分の松林につないで茶屋で休憩していたところ、馬が急に暴れて地藏を後足でけり倒したからだと伝えています。そのはずみで馬も瞬時に亡くなったのです。

仏罰に驚いた馬主は、地藏の功德を願い、馬の供養も兼ねて新たに同じ地藏尊道標をつくって追分へ寄進したというのです。敬念寺門前に移されたもう1つの左側の舟形地藏尊道標がこれにあたりと伝えています。天和2年道標と同じく、正面中央に地藏菩薩立像を浮彫りし、右縁に「右はせよしの」、左縁に「左ふじいでらなら」とあります。ただし、年号は刻まれていません。いまでは、敬念寺地藏尊で毎年8月23日、高見の里の地藏盆が行われています。



追分地藏尊道標 右が天和2年銘

74

高見の里開発者の林明

昭和初期、高見ノ里園芸住宅と高見ノ里駅

高見の里 2

近鉄南大阪線は、近鉄の前身の河陽鉄道かようが明治31年(1898)3月に柏原一古市間を走り、翌32年5月には、河陽鉄道を継いだ河南鉄道かなんが富田林一長野間を開通させたのが始まりです。

しかし、この時期、松原ではまだ鉄道は走っていませんでした。市域にレールが敷かれるのは、河南鉄道が大阪鉄道(大鉄)へと名を変えていた大正11年(1922)4月、道明寺一布忍間ぬのしのが通ってからです。そして、翌12年4月には、布忍一大阪天王寺(現大阪阿部野橋)が開通したのです。この時、河内松原や天美車庫前(現河内天美)の各駅も設けられましたが、高見ノ里駅の開業はまだでした。

昭和初期ごろ、高見ノ里駅周辺は、一面の田畑でした。明治22年(1889)4月に、丹北郡高見村たんのぼくが近隣の村々と合併して松原村高見となるのですが、高見集落は、のちに敷設される線路の南側にかたまっていました。

鉄道の北東側は松原村上田でしたが、高見の農地が多く、1軒の家もないこの地に昭和2年(1927)、大阪市内からアルミニウム製造技術者の林明あやひが移り住んできました。林は高見の地主とも協力して、住宅地を広げてゆき、簡易水道や碁盤目状の道路をつくって高見ノ里園芸住宅と名づけ、いまの高見の里住宅地の基礎を築いたのです。

林は明治16年(1883)10月、福島県相馬郡福田村(現新地町)に生まれました。明治41年(1908)、東京帝国大学採鉱冶金学科さいこうやきんを卒業後、翌年東北の仙台鉱山監督署技師となりました。明治45年(1912)には、大阪の藤田組に入り、秋田県の小坂鉱山こさかへ出向しま

した。やがて、大阪^{あえん}垂鉛鋳業株式会社に招かれ、ここで日本最初の垂鉛製造に従事するようになりました。そして、大正6年(1917)、わが国初のアルミニウム電気精錬に成功したのです。

昭和7年(1932)10月、高見とは西除川を隔てて隣接していた、当時の南河内郡^{きたやしも}北八下村河合(松原市河合)に帝国女子薬学専門学校(現大阪薬科大学)が北河内郡^{にしよげわ}守口町土居(守口市)から移転してきました。そこで、大阪鉄道は9月1日、高見ノ里駅をつくり、女子学生の通学の足としたのです。薬学専門学校の誘致と新駅の設置に貢献した1人が林だったのです。

林は、その後もアルミニウムの精錬の研究と後進の指導にあたります。昭和16年(1941)には、小豆島(香川県)でのイルミナイト鋳、琵琶湖東岸の天然ガス採取の実現に努力し、昭和21年(1946)には北海道での^{いおう}硫黄開発にも尽力したのです。

林は、昭和35年(1960)3月1日、77歳で亡くなりました。昭和49年(1974)10月、妻の^{はま}浜(貴族院議員松本剛吉次女)は、技術者であり、地域を愛した夫の偉業を伝えるため、子供らと共に線路沿いの自宅に「林明記念碑」「高見の里開発者」の石碑を建立したのです。



林明記念碑

75

高見ノ里駅津田式ケーボー号ポンプ

大臣マーク 手押しポンプと生活用水

高見の里 2

近鉄高見ノ里駅の大阪阿部野橋行き上りホームに、いまは使われていませんが、手押しポンプが残されています。ホームに旧式のポンプが見られる駅は、関西でもほとんどありません。ホーム中ほどに設置されているポンプには、本体上部前後に菱形マークの中に「大臣」の文字が入り、その下に「ケーボー号」とあります。また、下部前後には2つの三重線の区画の中に「津田式」と分けて、大きく鋳られています。水口やハンドルにも、菱形マークの「大臣」銘が記されていることがわかります。津田式ケーボー号とよばれるものです。

ポンプの下には、井戸が掘られており、駅員さんが毎日ホームで水の散布を行っていました。高見ノ里駅は、昭和7年(1932)9月1日に開業したのですが、井戸は昭和16年(1941)以降、昭和20年(1945)ごろまでに掘られ、ポンプが備え付けられたようです。

津田式ポンプは、ポンプ王とよばれる広島^{まじろう}の津田喜次郎(1888～1959)が、大正9年(1920)に開発した昇進式ポンプです。津田のポンプがのち、商工大臣となった藤沢幾之輔(1926～27、第1次若槻礼次郎内閣)の称賛を受けたことから、昭和4年(1929)に「大臣」の商標が出願されました。昭和16年から広島^{まじろう}の工場^{ふじさわのすけ}で本格的に製造されるようになり、同年の官報で菱形の「大臣」マークが社票と認められ、第1級規格品とされたのです。しかし、昭和20年の広島への原爆で、工場が破壊され、生産が縮小されました。

ポンプが設置されたと思われる昭和16年ごろ、現在の近畿日本鉄道(近鉄)は大阪鉄道(大鉄)とよばれていました。その大鉄が

昭和18年(1943)2月に関西急行鉄道(関急)と合併し、さらに、翌19年(1944)6月に南海鉄道と合併(後に再独立)して、いまの近鉄が誕生したのです。

松原市は、昭和30年(1955)2月1日に市制が敷されましたが、それまで水道が引かれず、人々の生活用水はおもに井戸水に頼っていました。30年12月に市役所に水道課が出来、同年に上田・阿保から送水が始まり、翌年から各地区でも水道が通ったのでした。

高見ノ里駅付近では、昭和31年に水道が使われるようになり、やがて駅の井戸水も利用されなくなりました。高見ノ里駅は、昭和46年(1971)にいまのように地下道で結ばれ、大幅な工事が行われたのですが、井戸は埋められず、ポンプも撤去されなかったのです。

戦前、高見ノ里駅周辺に多く掘られた井戸が、いまもホームだけでなく、住宅地にいくつか残っています。大阪市に住んでいた林明が昭和2年(1927)に高見ノ里園芸住宅を開き、井戸水から土管を敷いて簡易水道を設けました。その水源となった井戸が高見の里1丁目の長尾街道沿いの築局北側の駐車場にアスファルトで整地されていますが、現存しています。井戸の横には、ポンプ小屋(水道小屋)が建てられていました。



津田式ケーボー号ポンプ

松原市行政区画の変遷の概要

村名	元禄元年 (1688) 前後	元文2年 (1737)	幕末 (年不明)
三宅村	平野猪兵衛 (代)	秋元但馬守 (大) 久下藤十郎 (代)	秋元但馬守 (大) 多羅尾主税 (代)
池内村	小出越中守 (大)	小出主計 (旗)	高木主水正 (大)
城連寺村	万年長十郎 (代)	久下藤十郎 (代)	大久保加賀守 (大)
油上村	小川藤左衛門 (代)	秋元但馬守 (大)	秋元但馬守 (大)
芝村	小出越中守 (大)	小出主計 (旗)	北条相模守 (大)
東我堂村	〃	〃	〃
西我堂村	〃	〃	〃
堀村	小出主計 (旗)	〃	高木主水正 (大)
高木村	〃	〃	〃
清水村	〃	〃	〃
更池村	万年長十郎 (代)	〃 秋元但馬守 (大)	多羅尾主税 (代) 秋元但馬守 (大)
向井村	小出主計 (旗)	小出主計 (旗)	高木主水正 (大)
東代村	万年長十郎 (代)	秋元但馬守 (大)	秋元但馬守 (大)
高見村	小川藤左衛門 (代)	小出主計 (旗)	多羅尾主税 (代)
松原村 (上田・岡・新堂)	〃	秋元但馬守 (大)	秋元但馬守 (大)
立部村	万年長十郎 (代)	〃	〃
西大塚村	〃	〃	〃
東阿保村	小出主計 (旗)	〃	〃
西阿保村	〃	〃	〃
田井城村	岡田重右衛門 (代)	小出主計 (旗)	多羅尾主税 (代)
別所村	森本惣兵衛 (代)	秋元但馬守 (大)	秋元但馬守 (大)
一津屋村	〃	渡辺越中守 (大) 久下藤十郎 (代)	渡辺丹後守 (大) 高木主水正 (大)
小川村	辻弥左衛門 (代)	秋元但馬守 (大)	秋元但馬守 (大)
大堀村	片桐帯刀 (旗)	片桐帯刀 (旗)	片桐久太郎 (旗)
若林村	喜多見若狭守 (代)	戸田土佐守 (旗) 久下藤十郎 (代)	戸田土佐守 (旗) 多羅尾主税 (代)
丹南村	高木主水正 (大)	高木主水正 (大)	高木主水正 (大)
河合村	森本惣兵衛 (代)	片桐帯刀 (旗) 秋元但馬守 (大)	片桐久太郎 (旗) 秋元但馬守 (大)

村名	明治元年 (1868)	明治4年 (1871)	明治22年 (1889)	明治31年 (1896)	松原市			
三宅村	館林藩 南司農局	館林県 堺県	三宅村	三宅村	三宅村 30.2.1			
池内村	丹南藩	丹南県	天美村	天美村	天美町 30.2.1			
城連寺村	南司農局	堺県						
油上村	館林藩	館林県						
芝村	狭山藩	堺県						
東我堂村	〃	〃						
西我堂村	〃	〃						
堀村	丹南藩	丹南県						
高木村	〃	〃						
清水村	〃	〃						
更池村	南司農局 館林藩	堺県 館林県				布忍村	布忍村	布忍村 30.2.1
向井村	丹南藩	丹南県						
東代村	館林藩	館林県						
高見村	南司農局	堺県						
松原村 (上田・岡・新堂)	館林藩	館林県						
立部村	〃	〃						
西大塚村	〃	〃						
東阿保村	〃	〃						
西阿保村	〃	〃						
田井城村	南司農局	堺県						
別所村	館林藩	館林県	松原村	松原村	松原町 30.2.1			
一津屋村	伯太藩 丹南藩	伯太県 丹南県						
小川村	館林藩	堺県						
大畑村	南司農局	〃						
若林村	〃	〃						
丹南村	丹南藩	丹南県				丹南村	丹南村	丹南村 32.4.1
河合村	南司農局 館林藩	堺県 館林県				八上郡 北八下村	南河内郡 北八下村	河合村 32.10.15

注 領主欄の(代)は代官を示し、幕領=天領を管理、(大)大名領 (旗)旗本領を示している。
『行政区画の変遷の概要』『松原年代記(近世)』松原市史資料集第三号(再版)1998より一部改変。

執筆 西田孝司 (にしだ たかし)

昭和 22 年、松原市上田生まれ。

関西大学大学院文学研究科日本史学修士課程修了。

主な著書に

『雄略天皇陵と近世史料』(末吉舎、平成 3 年)

『続天皇陵を発掘せよ』(三一書房、平成 7 年・共著)

『文久山陵園』(新人物往来社、平成 17 年・共著)

「河内大塚山古墳と陵墓参考地」(『松原市史』第 2 巻、平成 20 年) などがある。

協力者一覧 南西コース

追分地蔵尊講・河合連合町会・敬念寺・近鉄グループホールディングス(株)・更池自治振興会地車保存会・浄信寺・稱念寺・称名寺・新堂墓地委員会・高見神社・高見町会・東代共同墓地財産管理委員会・井宮豊和・粟崎節子・田中品大・田中乾吉・田中孝佳・中野 敬・林 秀隆・増測昌利・保田紀元

(順不同・敬称略)

表紙…名産高安木綿(『河内名所図会』享和元年・1801 年)より

松原歴史ウォーク 3南西コース

発行日	平成 27 年 10 月 31 日
執筆	西田 孝司
編集	松原市教育委員会
発行	松原市
	大阪府松原市阿保 1-1-1
	☎ 072-334-1550
印刷	株式会社 地域文化財研究所

